

#### ④ 桜田門外の変

安政5(1858)年6月、幕府は大老井伊直弼(彦根藩主)が主導して、孝明天皇の許可を得ないまま日米修好通商条約に調印しました。当時はこの条約問題と將軍の跡継ぎ問題をめぐり大名の間で意見が対立していましたが、直弼は反対勢力を厳罰に処して異論を封じました。世に言う「安政の大獄」です。

こうした強硬姿勢に対して反発が広がり、安政7(1860=万延元)年3月3日、特に弾圧の激しかった水戸藩の浪士たちが中心となって、江戸城に登城する直弼を桜田門外で襲撃し殺害しました。

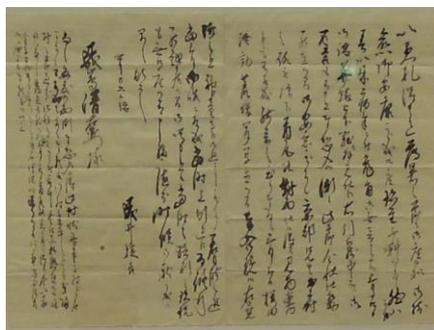
幕府首脳之死は、翌月(閏3月)末になってようやく公表されました。江戸の大事件はどのように精華町域に伝えられたのでしょうか。

No.25

#### 森井掟吉書状

[万延元(1860)年]4月26日付  
森島國男家文書 C2387

江戸の旗本天野家に家臣として仕えていた森井掟吉が、親類である祝園村の森島清右衛門に送った書状です。〈桜田騒動のあらましを聞き写したのでご覧ください。実家にもお回しください〉とあります。桜田門外の変発生から約3か月後(公表から約1か月後)のことです。



(前略)三月三日桜田騒動荒  
増聞写置候間、奉入御覽候、右  
御覽濟之上、神童寺江御廻し可  
被下候、(中略)  
四月廿六日認 森井掟吉  
森島清右衛門様  
(後略)

No.26

#### 安政七庚申年三月三日之騒動聞写

安政7(1860=万延元)年3月3日  
森島國男家文書 C2390

大老井伊直弼が暗殺された桜田門外の変の詳細を記した帳面(横帳)。展示No.25の森井掟吉書状と筆跡は同じであり、書状に同封して江戸から祝園へ送られたものと判断されます。

(部分)

上杉彈正大弼外桜田居屋敷辻番人申出候者、今朝五ツ半時、井伊掃部頭様御登城見請候處、松平大隅守様御屋敷前二而、何者共不相知七八人、右行列江拔身二而切込候様子二相見候得共、大勢之人立切合之者音而已二而、駈与様子ハ相分不申候、其節黒羽織、馬乗袴二而服立取、手疵負候者老人、番所前江走り来り候二付、様子相尋候得共、一言之答も無之、黒羅砂之柄袋取捨、直様拔身二而右場所江馳り欠出申候、無間も馬乗袴裾ヲ取、白襪ヲ懸候者老人、拔身江首ヲ貫き、其外拔身六七人、日比谷御門之方江立去り候段届出候、右者持場之外二候得共、不容易騒動、且前文之通り、柄袋打捨置候二付、此段不取敢御届申上候、以上

三月三日 上杉彈正大弼家来 矢島藤馬

安政七庚申年三月三日之騒動聞写

(中略)

今朝五ツ半時頃、当御門御橋之方より疵受候侍躰之男四五人、西番所前江罷越候、内藤紀伊守殿江致案内候様二与申間候、然ル処御役人様方御登城懸ケ下座中二付、下陣の方江相下ケ置候様申間候處、其儘走り当御門外江欠出し候間、跡ヲ追欠候得共、何方江参り候哉、相分不申候得共、此段御届申上候、以上

三月三日 馬場先御門番 戸田七之助家来 生沼蔵人

(後略)

No.27-1

### 当節世の中ない尽し

年未詳 (江戸時代後期)  
森島國男家文書 C2395

今年のよふなことハない  
上巳の大雪めつたにない  
桜田さうとうとほふもない  
鉄砲でうつたハとほうもない  
そこでどふやら御首がない  
供人ひとりもおふ人がない  
狼藉ものでよハきがない  
老人や式人で仕方がない  
御駕は在てもかきてがない  
引馬どこやらうせてない  
上杉辻番色がない  
杵築家来出る人がない  
薩摩の助太刀わからない  
日比谷馬場崎殿でない  
脇坂取次出る人がない  
会津屋敷じよさいがない  
讃岐のさハぎは  
夜分は通行老人もない  
大名出歩行ねつからない  
諸屋敷門々出入がない  
花は咲ても見る人がない  
茶屋小屋芝居ゆきてがない  
小泉足利つまらない  
伯耆噂もそふてない  
そこで板倉つまらない  
毛利此節呼人がない  
常陸の宝蔵宝がない  
老中増供ミともない  
から行役人ねるまがない  
一躰親父は人でない  
ぜんたい役人腰がない  
御役にたつ人ちつともない  
是では世の中治らない  
それでも軍はもふくくない  
どうかわたしは請合ない

当節世の中ない尽し

今年のよふなことハない  
上巳の大雪めつたにない  
桜田さうとうとほふもない  
鉄砲でうつたハとほうもない  
そこでどふやら御首がない  
供人ひとりもおふ人がない  
狼藉ものでよハきがない  
老人や式人で仕方がない  
御駕は在てもかきてがない  
引馬どこやらうせてない  
上杉辻番色がない  
杵築家来出る人がない  
薩摩の助太刀わからない  
日比谷馬場崎殿でない  
脇坂取次出る人がない  
会津屋敷じよさいがない  
讃岐のさハぎは  
夜分は通行老人もない  
大名出歩行ねつからない  
諸屋敷門々出入がない  
花は咲ても見る人がない  
茶屋小屋芝居ゆきてがない  
小泉足利つまらない  
伯耆噂もそふてない  
そこで板倉つまらない  
毛利此節呼人がない  
常陸の宝蔵宝がない  
老中増供ミともない  
から行役人ねるまがない  
一躰親父は人でない  
ぜんたい役人腰がない  
御役にたつ人ちつともない  
是では世の中治らない  
それでも軍はもふくくない  
どうかわたしは請合ない

上巳の節句 (3月3日、ひな祭り) に、大雪が降るなか起きた桜田門外の変を諷刺した歌です。歌詞の最後を「無い」という言葉でそろえて、軽妙なリズムで歌っています。

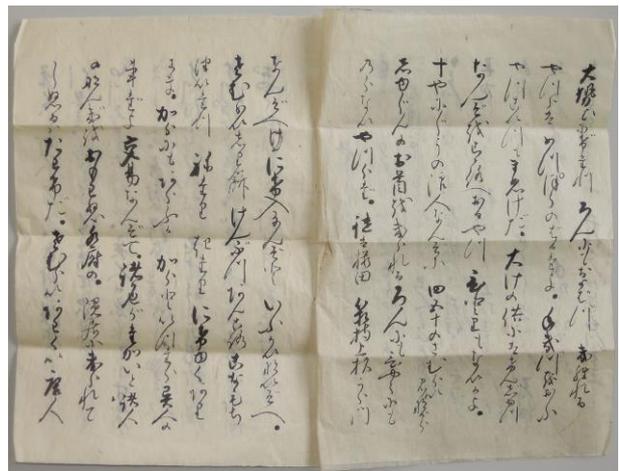
# そうどうちよぼくれ

年未詳（江戸時代後期）

森島國男家文書 C2397

「ちよぼくれ」とは大道芸の一つで、僧の姿をした芸人が木魚をたたきながら、滑稽な語りや歌を聞かせるもので、時の政治を諷刺して人気を博しました。

この「ちよぼくれ」は、藩主が殺害された彦根藩



を「めつぼうのばか」と言い、殺害を実行した浪士が出た御三家の水戸藩も「つぶしてしまふがよつぽといふ」と、双方を痛烈に批判しています。

そうどうちよぼくれ

やれく／＼旦那さん。今度のそうどう聞いてもくんねへ。三月三日に雪がふるとは、せんたいみもんのかわたた事だよ。大老職なる井伊さん登城の其ゆきがけにて。桜田御門の上杉辻番びつくりぎやうてん。水府の浪人三尺ばかりのとうくぬいたり。てつぼう打たり、手鑓ヲもつたり。手がうあてたりきごみをきたりや。井伊さん供連ひつくりぎやうてん。大勢ひにげたり、ろんにもおよぼづ、きられるやつらは、めつぼうのばかだよ。手きづをおふやつ、こいつもまぬけだ。大けの供には、けんじゆつなんぞをころへおるやつ、ひとりもないかよ。十やにじうの浪人なんぞに、四五十のさむらいみながらしゆじんのお首をきられる、ろんにもひやうにももらないやつらだ。鐘は桜田、箱持上杉うら門なんぞへけにけ入なんぞと、いふかないぞへ。さむらいしり餅、けんぶつあんころ、こなもちついたり、ねたり、起たり、にけゆくありさま。からにもあらふか、からといつたら異人の事だよ、交易なんぞで。諸色がたかいと、諸人のなんぎをおもわぬ水府の。隠居にきられてしぬるハたわけだ。

（後略）